

## 発掘を通じて ローマ文化の秘密に迫る

——これまで、数多くの遺跡や遺物を発見されてこられたとのことですが、ローマ時代の遺跡発掘や古代史を研究されることの魅力についてお聞かせください。

**青柳**——ローマは、紀元前27年頃にローマ帝国ができ、紀元後330年にコンスタンティノープルに遷都するまでの間、地中海全体を支配する、当時の古代国家として最強の国でした。2000年も前に、今のイラクからイギリスのあるブリテン島までの広域を支配し、システムチックな社会をつくり上げた。どうしてそんなに早い段階で、あれだけの広大な領域を支配する国、あるいは文化ができたのかというところに魅力を感じたのが、ローマを研究してみたいと思った一番の原点です。

アプローチはいろいろあると思いますが、私の場合は発掘を通して具体的に確認できる方法でローマ文化に迫りたいと、30歳にならないうちから自分で小さなチームをつくり、ずっと発掘を続けてきました。文献に書いてあることは、裁判でいえば証言みたいなもので、前後関係が変わっていたり、誇張されていることもあります。一方、考古学的なやり方というのは、裁判で言えば、物証のようなものです。確かな物証を積み重ねていくことで、ある一定の広がりのある文化、文明

# 青柳

AOYAGI  
Masanori

# 正規

さん

## に伺いました

ローマ時代の市民生活や都市づくりに造詣が深い青柳正規さんに、  
文明の興亡のメカニズムと土木へのメッセージについて伺った。

を再現できる。そこが大きな魅力です。ローマの社会や文化については今でもわからないことが多いのですが、発掘を通じて少しでも秘密に迫りたいと思っています。

### 文明は繁栄の理由が 重石になり衰退する

——歴史上、発展を遂げた文明が衰退し滅亡するのは、どういうメカニズムが働くからなのでしょう。また、現在の日本はどのような状態にあるとお考えでしょうか。

**青柳**——ある文明が隆昌していく理由はさまざまです。しかし、栄えたものは、必ず頂点が来ます。文明というのは、繁栄の理由が徐々に重石

になり、それが原因で衰退し、滅びていきます。カンフル注射をして繁栄を長引かせることはできても、変えることはできないのです。たとえば、ローマ帝国で一番栄えていたのは、2世紀の五賢帝時代です。皇帝トラリアヌスは、ローマ帝国の領土を最大限に広げました。しかし、領土の拡大に伴い、異民族などの侵入が増え、軍備費が増大していきました。さらに、整備されていた流通網が分断され、領内の食糧の再配分にも支障が出てくるようになりました。紀元後3世紀にはさまざまな問題が噴出し、圧倒的な強国であったローマが強国ゆえに衰退に向かいました。それは人間の体に刺さったトゲと同じです。トゲというのは命に影響がありませんが、その人の行動を縛ります。体制も同じで、全体として

あおやぎ・まさのり さん  
プロフィール

1944年大連生まれ。ギリシア・ローマ考古学者。1967年東京大学文学部美術史学科卒業。1969～1972年ローマ大学に留学、古代ローマ美術史・考古学を学ぶ。文学博士。東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授、同研究科長、文学部長、同副学長を経て、現在、国立西洋美術館館長。東京大学名誉教授。2006年紫綬褒章。



は小さな波紋でも、高度に出来上がった体制であるほど、影響力が強いのです。

さらに、重要なことはメンタルの部分です。人びとは社会が下り坂になると、昔の夏は煌々と太陽が輝いて暑いほどだったのに、今年の夏は寒いくらいだと言ひ出します。日本でも失われた20年と言われ、衰退期だと言う人もいますが、私は安定期だと思います。そういうメンタルなとらえ方を変えることが重要だと思います。

日本は、明治以降地球上の奇跡というべき成長を遂げてきました。これほど豊かになつた国はほかにありません。量的な拡大は終わつてい

かもしれませんが、一人ひとりがもつと賢く生活できる、いわゆる質的な面では、まだまだ高いレベルを求めていきます。安定社会を前提に、個人の幸せ度をどれだけ高めていけるかをみんな考えていく。そのための可能性は、日本には十分に残されていると思います。

## ぜひ土木博物館をつくって欲しい

——土木業界に対して、日頃より気にかけていること、メッセージなどございましたらお聞かせ

ください。

**青柳**——昔から、エンジニアリングにはミリタリーとシビルの二つがあり、土木を代表とするシビルエンジニアリングの重要性は、今でもまったく変わりません。ただ、土木に携わっている方の土木概念というのが少し狭すぎる気がしています。確かに日本の戦後復興や都市化のために、土木は大変な貢献をしてきました。しかし、今や都市化のためのシビルエンジニアリングということ以上に、危機に瀕している環境を維持する、守る、改善するシビルエンジニアリングというものが重要になっています。この地球上に本当に人間が手を付けていない自然というのは限られている。自然を守るためにも土木が必要なのです。

そういう意味では、土木というものをもう一度考え直す必要があるのではないのでしょうか。ネーミングだけでもいい。社会一般の土木という言葉に対する認識を変えたいということが、今土木に要求されている最大のことではないかと思うのです。

そのためにも広報活動は重要です。たとえば、富山県の立山カルデラには、世界に冠たる砂防ダムがありますが、今「Sabon」という言葉が、Tsunamiのように国際語になりつつあります。そういう部分を日本社会だけではなく、国際社会の中に広めていくことも大切です。また、私自身は国立西洋美術館の館長をしますが、ぜひ土木の世界でも総合的な土木博物館をつくり、もつと一般に向けて情報発信をしてほしいと思います。